

粕谷 純子

「推しの彼方」

登場人物

西沢杏奈(20)(22)(30)看護師、トリコロールズ・元リーダー
奥平(田原)仁美(20)(22)(30)主婦、トリコロールズ・元メンバー

遠山(森)さくら(20)(22)(30)居酒屋店員、トリコロールズ元メンバー

松林聡(40)末期のがん患者
桂木みなみ(35)杏奈の先輩看護師

奥平唯(7)仁美の娘
奥平優一(40)仁美の夫、歯科医師

遠山洋平(35)さくらの夫、居酒屋を経営

松林治(64)松林聡の叔父
西沢公子(58)杏奈の母、訪問看護師

柿沢夏子(77)入院患者

ギター少女(19)
ファンA
ファンB

○北山病院・入院病棟の廊下

白衣姿の西沢杏奈（30）が車イスに乗った柿沢夏子（77）の向かいに立ち、説得している。

杏奈「夏子さん、退院はまだ早いですよ。ちゃんと治してから、お家に帰りましょうね」
夏子「私はね、歌手なのよ！休んでなんていられないの！」

呆れ顔の杏奈。

杏奈「…はあ。でもその身体では無理ですよ、退院」

夏子、杏奈を手で払うしぐさ。

夏子「ファンが私を待ってるの！私の歌を待ってるのよ！あなたは歌手じゃないから、気持ちがわからないでしょうけどね！」

杏奈、夏子の言葉に一瞬、黙り込む。
二人のやりとりを見ていた桂木みなみ（35）、夏子に近づいて、

みなみ「夏子さん、ステージに立つ前に：お風呂に入ってお身体綺麗にしましょうね」

夏子「そうね。こんな人、相手にしてられないわ！私は忙しいの」

みなみに連れられて、浴室に向かう夏子。

その様子を不安そうに見ている、杏奈。

○同・ロッカールーム（タ）

ロッカー前で私服に着替える杏奈。

みなみが室内に入ってくる。

みなみ「お疲れさま」

杏奈、みなみに気づき、

杏奈「あっ…お疲れさまです。桂木さん、さ

つきは…すみませんでした」

みなみ「いいの、いいの。大変だよね、夏子

さんの妄想に付き合うのは」

杏奈「…夏子さんは、なんで自分のことを歌手だと思いついてるのでしょうか。歌手になるのが夢だったとか…ですかね」

みなみ、淡々と着替えながら、
みなみ「そういう病気だからじゃない？」

杏奈、ショルダーカバンの紐を両手で
キュッと握る。

杏奈「…そうですね」

○駅前・路上（夜）

路上に座り込み、ギターを演奏する少
女（19）。

演奏に目もくれず、その前を素通りす
る人々。

くたびれた顔をした杏奈、少女の前を
通りかかり、少女の演奏に足を止める。

杏奈M「…夢、私も持ってたんだ。でも、私
は夢の世界で必要とされてたんだろうか」

○（回想）ライブハウス・客席（夜）

T 8年前。

赤・青・白のハチマキを各々巻いた、
アイドルグループ『トリコロールズ』
のファン達。黄色い声援と手拍子が聞
こえる。

○同・舞台袖（夜）

赤い衣装の杏奈（２２）、青い衣装の

田原仁美（２２）、白い衣装の森さく

ら（２２）が円陣を組んでいる。

杏奈「今日も客席は満員！メジャーデビューの話も出てるし、めっちゃめっちゃ気合入れていくよ！」

頷く、仁美とさくら。

杏奈「トリコロールズ、ファイト！」

杏奈・仁美・さくら「オー！」

○同・ステージ（夜）

歓声を浴びてステージ上に登場する、

杏奈、仁美、さくら。

三人とも、とびきりの笑顔で飛んだり跳ねたり。

×

×

×

アップテンポの曲に合わせて歌い、踊

る杏奈、仁美、さくら。

杏奈・仁美・さくら「いえい！心ここにあら
ず！キミのトリコさー」

サイリウムを両手に持ち、汗だくにな
って声援を送るファンたち。

青いサイリウムが他の色のサイリウム
より多い。

ファンA「仁美ー！」

ファンB「仁美！最高！」

青いサイリウムの集団を目にして、
苦笑いする杏奈。

（回想終わり）

○奥平家のマンション・外観（夜）

重厚感のある外壁、築年数の新しい低
層マンション。

○同・キッチン（夜）

奥平仁美（30）、シチュ―の入った
鍋をテーブルに運ぶ。

椅子に座り、タブレットで動画を見て

いる奥平唯（7）。

仁美「唯、何の動画みてるの？」

唯「Kポップの動画」

仁美、唯のタブレットを覗き込む。K

ポップの動画に釘付けの仁美。

仁美「へえー。そろそろパパ帰ってくるから、動画みるのやめなさいね」

唯「パパってさ、アイドル嫌いなのか？動画観てないで、勉強しなさい！早く寝なさい！
って怒ってばかり」

仁美「それはね：唯を立派に育てるためよ」

唯「立派って何？人生、楽しんじゃいけないの？」

仁美、唯の言葉に苦笑いして、

仁美「唯、難しいこと言うようになったわね」

○居酒屋「ようちゃん」外観（夜）

年季の入った木造二階立ての一階。

赤提灯が灯り、煙突から白い煙がモクモク出ている。

○同・厨房（夜）

ハイボールの入ったジョッキと焼き鳥の皿をトレイに乗せている、遠山さくら（30）。

店内のスピーカーから、女性アイドルの曲が流れてくる。

眉間に皺を寄せるさくら。

さくら、皿に盛り付けをしている遠山

洋平（35）に向かって、

さくら「ようちゃん、演歌のプレイリストに

なっていないよ！」

洋平「ん？手が離せないから、さくら変えて」

MP3プレイヤーを操作して、素早く

演歌のプレイリストに変える、さくら。

○西沢家・リビング（夜）

ソファで寝ころんでいる、西沢公子
(58)。

時計の針は20時を過ぎている。

杏奈が帰宅し、リビングに入ってくる。

杏奈「ただいま」

公子、目を覚まして、

公子「あら！私ったら：また寝ちゃってた。

杏奈、おかえり。ごめんねー夕飯いまから
作ってもいい？」

杏奈「いいよ。そっちはそっちで疲れてるで
しょ。ラーメンでも作ろうか？」

公子「ごめんね」

○同・ダイニングテーブル(夜)

麵をすすする西沢親子。

杏奈、箸を井ぶりの上に置き、

杏奈「：お母さんが前に訪問してた柿沢夏子
さん、覚えてる？」

公子「ああ、お金持ちの」

杏奈「今さ、うちの病棟にいるんだけど：」

公子「そう：緩和ケア病棟に」

杏奈「帰宅願望が強くて大変なんだ。あと、

自分は歌手だと思い込んでる」

公子「そういえば：夏子さん、家でよく歌ってたわ。ジャズバーで歌い手をしてたけど、結婚を機に辞めたんだって。旦那さんに反対されて泣く泣く：」

杏奈「：へえ」

公子も箸を井ぶりの上に置き、

公子「そういう後悔とか無念ってき、人生が終盤に近づく：余計と強く感じるのよ

ね。そんな患者さん、たくさん見てきた」

杏奈「：私もそうなるんだろうな。人生の終盤に」

公子「人生なんて諦めの連続よ。だけど杏奈は、今こうして看護師やってるんだから立派よ」

杏奈、残りのスープを飲み干す。

公子「少しはスープ残さない。塩分過多よ」
心配そうに杏奈を見ている公子。

○北山病院・ナースステーション（朝）

みなみ、P Cで患者情報を確認している。

白衣姿の杏奈が入ってくる。

杏奈「おはようございます」

みなみ「おはよう。昨日、急性期病棟から移ってきた松林聡さん、西沢さんに担当お願いしてもいい？」

杏奈「いいですよ」

みなみの隣のデスクP Cで松林の情報を確認する杏奈。

杏奈「…スキルス性」

○同・病室（朝）

ベッドに横になっている、スウェット姿の松林聡（40）。

血圧計を持った杏奈、松林の元を訪れる。

杏奈「おはようございます、松林さん。担当看護師の西沢です。よろしくお願いします」

松林「：よろしくです」

松林、ボーっと天井を見つめている。

杏奈「朝の血圧を測りますね。右腕、失礼します」

杏奈、血圧計のマンシェットを松林の腕に巻く。

杏奈「腕をギュッと締めていきますね」

松林、杏奈をチラッと見て、

松林「：えっ？」

表情が固まる松林。

杏奈「ご気分、大丈夫ですか？」

松林の血圧の値が高く表示される。

杏奈「あれ？高いな。松林さん、ご気分大丈夫です？」

松林、杏奈を見て固まったまま。

杏奈「松林さん？先生呼びますか？」

やっと我に返る松林、首を横に振り

松林「：大丈夫です、いや：大丈夫じゃない」

杏奈「えっ、どっちですか」

松林「その、体調というより：気持ちの問題」

なので。落ち着け自分、落ち着け！」

松林を不審そうに見る、杏奈。

杏奈「ご病気のことで、色々と不安もあると思います。私に出来ることがあれば、何でも言ってくださいね」

松林、大声で泣き出す。

狼狽える、杏奈。

杏奈「えっ、松林さん？どうされました？」

大声で泣き続ける松林。

迷惑そうな顔で杏奈と松林を見ている、

他の入院患者たち。

杏奈の元に駆けつける、みなみ。

みなみ「どうした？何があつたの？松林さん、どうされましたか？」

松林「看護師さん：トリコロールズの杏奈ちゃんですよね」

杏奈、松林の言葉に固まっている。

みなみ「なんですかそれ？」

松林「伝説のアイドル、トリコロールズです。

まさか、リーダーの杏奈ちゃんにこうして
会えるなんて。生きていてよかった」

みなみ「トリコなんちゃらって何です？ 西沢
さん、意味わかる？」

眉間に皺を寄せ、俯いている杏奈。

杏奈「…私も意味がわかりません」

松林「杏奈ちゃんですよ？ 8年前に解散し
た伝説のアイドル、トリコロールズの」

みなみ、杏奈を凝視して、

みなみ「アイドル？ 西沢さんが？」

杏奈「…人違いですよ。アイドルなんて、私
がやる訳ないじゃないですか。松林さん、
落ち着いてください。ここは病院です。

周りの患者さんのご迷惑にならないよう、
静かに過ごしてくださいね」

杏奈に冷たく言い放たれ、黙る松林。

足早に病室を出ていく、杏奈。

○奥平家・リビング（朝）

ソファーに座り、新聞を読んでいる

奥平優一（40）。

仁美、優一に珈琲の入ったカップを差し出す。

優一、黙って片手でカップを受け取り、

優一「唯、ちゃんと宿題やってる？」

仁美「…やるように言ってます」

優一「やるように言うだけじゃなくて、ちゃんと宿題やってるか監督しないと」

珈琲を飲み干す、優一。

仁美「…はい」

優一「唯には頑張って良い成績をとってもらわないと。将来の受験に影響する」

仁美「…そうですね」

優一「まったく唯の奴、アイドルの動画なんて観て何が楽しいんだ。君に段々似てきたら、俺は心配だよ。人生を棒に振ってしまいかもしれない。頼むよ、唯をしっかり監督して」

足早にリビングを出ていく優一。

仁美、両手で拳を作って震わせている。

○北山病院・病室

杏奈、薬と水の入ったコップを持ち、

松林のベッドを訪れる。

杏奈「松林さん、食後のお薬お持ちしました」

松林「あの：今朝は大変失礼しました。僕の勘違いです。病氣のことを考えすぎて、変になってたんだと：思います」

作り笑顔の杏奈、ベッドサイドテーブルに薬とコップを置き、

杏奈「大丈夫ですよ。病氣の不安で：大変お辛いと思いますから」

松林「進行の早い癌だって診断されたとき、目の前が真っ暗になりました。ああ：親父とお袋に、こんな姿を見せずに済んでよかったとも思ってたけど。二人とも既に亡くなっている、俺は：孫の顔もみせられない親不孝者だったから。ずっと彼女も出来ないままだったし。俺の40年：なんだったんだろうって」

杏奈、しばしの沈黙のあと、

杏奈「親御さんはきつと：結婚とか孫の顔とかより、松林さん自身が毎日を懸命に生きて、日々に楽しみを見いだせることを：きつと願っていたはずですよ。って他人の私が偉そうに言えませんが」

松林「：日々の楽しみ、それが僕にとってトリコロールズだったんです。生きる喜びについていても過言じゃない」

杏奈、静かに松林を見ている。

杏奈「：生きる喜びですか」

松林「両親が亡くなり、仕事もうまくいかず：自暴自棄になった頃、出会ったんです。彼女たちに」

○（回想）駅前（夕）

T 10年前

ライブ開催のビラを配る杏奈（20）、仁美（20）、さくら（20）の三人。行き交う人々にビラを渡そうとするが、無視され受け取ってもらえない。

杏奈、駅前の路上に座り込み、落ち込んでいる松林（30）に気づく。

松林に駆け寄る杏奈たち。

杏奈「あの：よかったら私たちのライブ観に来てください。今夜7時から、駅近くのライブハウス『ルーム』で行います」

松林にビラを渡す杏奈。

松林「：はあ」

恐る恐るビラを受け取る、松林。

さくら「チケットめっちゃ余ってます！助けてください！」

仁美、さくらを小突いて、

仁美「さくら！すみません。気が向いたらで全然いいんで」

杏奈「売れないグループですが、私たちの歌と踊りで、落ち込んでる人を笑顔にしたいと思っています！お兄さんにも笑顔になってほしい！」

松林、杏奈たちの宣伝に圧倒されている。

○（回想）ライブハウス・客席（夜）

松林、ドリンクを片手に入ってくる。

客席に、10人程しか観客が入っていない。

松林「…少ない」

○（回想）同・ステージ（夜）

ステージ上で飛んだり跳ねたり、汗だくになりながらも、笑顔で踊っている杏奈、仁美、さくら。

ステージの最前列で歓声をあげる数名のファンたち。

松林、ファンたちの様子をみて、自分も負けじと歓声を送る。

松林「トリコロールズ！ファイト！」

（回想終わり）

○北山病院・病室（昼）

トリコロールズの思い出話を熱く語る、松林。

松林の話を、俯いて聞いている杏奈。

松林「一生懸命な彼女たちに惹かれて、ライブに初参戦して：荒れていた自分が、彼女たちのライブで癒されていくのを実感しました。ライブで彼女たちに会うために、頑張って生きようって思えた：」

杏奈、少し目頭が熱くなっている。

松林「人気も出てきて、いよいよメジャーデビューかって時に：色々あつて、8年前に解散しちゃったんですよ。ショックだったけど、ライブ映像を見返したり、解散後もファンの集いに参加したりして、ずっと心の支えにしてました」

杏奈「：そうなんですネ」

松林「僕の最後の願いは：トリコロールズが再結成すること。そして最後に：ライブを目の前で見る事。すみませんね：熱く語りすぎました。看護師さん、トリコロールズのメンバーに似てたもので。下の名前も同じだし」

杏奈、顔をあげて、

杏奈「…ごめんなさい、そうです。嘘ついて
ました。私、元トリコロールズの杏奈です」

松林「…やっぱり、杏奈ちゃんか」

松林、再び号泣し咳き込む。

杏奈「ごめんなさい。大丈夫ですか？」

松林の背中を擦る、杏奈。

松林「…難しいと思うけど、どうか叶えて

頂けませんか：僕の最後の願いを」

杏奈「…それは」

苦しそうに咳き込む松林。

松林の背中を、擦り続ける杏奈。

杏奈「先生、お呼びしますね」

杏奈、院内ピッチを取り出して、医師
を呼ぶ。

○同・ロッカールーム（タ）

私服に着替え中のみなみ。

杏奈が室内に入ってくる。

杏奈「お疲れ様です」

みなみ「あつ、お疲れ様ー。西沢さん、マジでアイドルやってんだね」

杏奈「…えっ？」

みなみ「ごめん、ググった。この時代は便利でもあるけど、知られたくない過去がある人には辛いよね。しかし驚いたな」

杏奈「…黒歴史なんで隠してました。なのにファンだった松林さんに見つかっちゃって」
みなみ「そりや…しんどいね」

杏奈、ため息をつき、

杏奈「松林さんに…グループ再結成して、最後にライブを見せてほしいって。それが最後の願いだって言われました」

みなみ、鏡の前で髪を整える。

みなみ「あんまりさ、悩むほど肩入れしないほうがいいよ。西沢さん、今はここの看護師なの。看護師の務めで忙しいでしょ？」

杏奈「…ですよね」

みなみ「じゃ、私はこれから用事があるんで。お先に」

杏奈「お疲れ様です」

部屋を出る、みなみ。

○西沢家・杏奈の部屋（夜）

杏奈、押し入れから段ボールの箱を取り出す。箱の中には、赤色のステージ衣装や、トリコロールズの3人で撮影した写真が入っている。

杏奈M「毎度、捨てようとしても：捨てられない黒歴史」

杏奈、机の上からスマホを手に取り、連絡先一覧から『森さくら』の登録を探す。

杏奈M「挫折。羞恥心。後悔。だけど本当に辛いのは：戦友と距離を置いたこと」

さくらの番号に電話をかけるか悩み、室内をうろうろする杏奈。

杏奈、スマホを手に深呼吸して、

杏奈「よし！」

さくらに電話を掛ける。

○居酒屋「ようちゃん」店内（夜）

客が数名しかおらず、空いてる店内。

ぎこちない表情の杏奈、テーブル席に座っている。

さくら、グラスを手にして杏奈に近づく。

さくら「杏奈：元気だった？」

杏奈「ごめん急に。番号が変わってなくて：よかったよ。連絡つかなかったら、ひとり悶々としてるとこだった」

さくら、ウーロン茶の入ったグラスを

杏奈に差し出す。

杏奈「ありがと」

さくら「：8年振りだもんね。そういえば、結婚した事、言ってなかったね」

杏奈「そうなの？遅ればせながら：結婚おめでとう」

さくら、厨房にいる洋平を指さして、さくら「旦那。この店主。小さい店だけど頑張っ一緒に切り盛りしてる」

洋平、杏奈の方をみて会釈する。

洋平「トリコロールズの杏奈さんですよね！」

洋平に苦笑いで会釈する杏奈、さくらに耳打ちして、

杏奈「旦那さんに話したの？」

さくら「話したも何も：彼はうちのファンだったから」

杏奈「ちよつと！さくらまでファンに手をつけたわけ？」

さくら、テーブルをドンツと叩いて、
さくら「人聞きの悪い！私はね、解散してから、焼き鳥屋でバイトの身だった頃に、旦那と出会ったの。そしたら偶然にもファンだったって聞いて。仁美とは違うからね」

杏奈、さくらに軽く頭をさげて、

杏奈「ごめん。そういえば仁美：どうしてるかな」

さくら「さあね。デキ婚相手は歯医者だし、セレブマダムを謳歌してるんじゃない？杏奈、せっかくだし：何かお酒飲む？」

×

×

×

杏奈、生ビールジョッキを3杯飲み干し、赤ら顔。呂律が回っていない。

杏奈「だぁーかーら！悩んでるの！でもさぁープライドとか？しゅーち心とか？より大事なもの？がぁーあるんじやにやいかと…」
呆れ顔のさくら。

さくら「…で、つまり杏奈の患者さんの為に、再結成して1日限りのライブをやってあげたいと？そういうことで解釈合ってる？」

杏奈、ふらつきながらも首を縦に振る。

さくら「あんた…飲みすぎだよ」

杏奈の隣の椅子に座る、さくら。

さくら、杏奈をしばし見つめ、

さくら「そんなに長い間…うちらを思ってくれてるファンがいたんだ。なら…うちらも覚悟みせないと。夢を追った者の務めかな」

杏奈「さくらぁ！」

杏奈、さくらに抱き着くが、そのままイビキをたてて寝てしまう。

さくら、杏奈の肩を叩き、

さくら「まったく、杏奈！ごめん洋ちゃん、ちよつと運ぶの手伝って！」

○同・住居スペース（夜）

遠山夫妻に2階の和室に運ばれ、布団に寝かされている杏奈。

杏奈、突然目を覚まして、

杏奈「ひとみい！」

思い出したようにスマホを取り出し、登録一覧から仁美の電話番号を探す、

杏奈。探すが見つからない。

和室を覗き込む、さくら。

さくら、和室に入り、

さくら「もうかけたわよ、仁美に。杏奈、8年前に怒り狂って、仁美の番号消してたでしょうが」

杏奈「…そうだった」

さくら「私もかけるの迷ったよ……。けどさ、
8年経ってもファンがいてくれる有難さ
か：色々考えたら、居ても立っても居られ
なくて」

杏奈「で：どうだった、仁美？」

さくら「駄目だって。奥平家の妻としての立
場がなんちゃらって言い訳してた。アホく
さ」

うなだれる杏奈。

さくら「何が立場よ：解散の原因作っという
さ」

杏奈、ため息をついて、

杏奈「もう仁美を責めるのはやめよ。今は母
親として頑張ってるんだろうし」

さくら、柱に寄りかかり、

さくら「私さ：子どもができにくい体質らし
くて。仁美に嫉妬してんのかも。情けない
よ、自分が」

杏奈「…え」

さくら「当時はデキ婚って何なのって怒って

たけど：本当はさ、おめでたいことなんだ
よね。妊娠って奇跡だよ。私たちはさ、あ
の頃、仁美に寄り添うべきだったんだよ」

杏奈「：さくら」

杏奈、立ち上がってさくらの元へ行こ
うとするが、ふらついて転ぶ。

さくら、杏奈に駆け寄り、

さくら「危ないって！てか、酒くさ！仕方な
い：今晚うち泊ってっていいよ」

杏奈、笑っている。

○奥平家マンション・唯の部屋（夜）

タブレットでトリコロールズの動画を

観ている、パジャマ姿の唯。

仁美、部屋に入ってきて、

仁美「唯、眠れないの？」

仁美、タブレットの動画を見て固まる。

唯「ここで踊ってるの、ママでしょ？青い服
着た人：」

仁美、タブレットを唯の手から奪う。

仁美「駄目よ、こんな動画は！」

声を荒げる仁美に驚き、すすり泣く唯。

仁美「ごめん、唯。ママ：その：」

唯「奈々ちゃんに、唯のママはアイドルだったんだねって言われて。動画、教えてもらったの。どうして駄目なの？」

黙り込む、仁美。

○（回想）控室

杏奈（22）とさくら（22）、仁美（22）に詰め寄っている。

仁美「：ごめん」

杏奈「ねえ：なんで大事な時期に、こんなことになるわけ？いつから付き合ってたの？」

仁美「：半年くらい前から」

杏奈「で、相手との子が出来たと。出来てしまったと」

杏奈、頭を抱えて室内をウロウロ行ったり来たり。

さくら「こんなこと：ファンが受け入れられ

るわけがない」

杏奈「時間の問題で、解散になると思う」

仁美「…解散じゃなくて、私が抜けても、杏

奈とさくらにはグループを続けてほしい」

杏奈「悔しいけど…正直、仁美の人气で保ってるグループよ？仁美がいないなら、終わりだよ」

さくら「トリコロルズは…3人じゃなきゃ意味がない」

仁美「だったら…新しいメンバーを探してよ」

杏奈「何言ってるの…うちらだから、トリコロルズなの！」

仁美「…ごめんなさい、私のせいで…」

頭を深々とさげる、仁美。

（回想終わり）

○北山病院・ロッカールーム（朝）

こめかみを手で押さえている、白衣に着替えた杏奈。

杏奈「…やっちゃまった」

杏奈、ウコンエキスのドリンクをバ
ックから取り出して、飲み干す。

○同・病室（朝）

ベッドで眠っている松林。

杏奈、松林の様子を見に訪れる。

松林の顔を不安そうに見ている、杏
奈。

○同・ナースステーション

デスクのP Cに向かい、患者情報を
入力している、杏奈。

杏奈の隣に座り、書類の整理をして
いる、みなみ。

みなみ「…顔色悪いよね」

杏奈「実は…二日酔いでして」

みなみ「西沢さんじゃなくて。松林さんのこ
とね」

杏奈「…すみません」

みなみ「今後は痛み止めの影響で意識が朦朧

としてしまおうし：早いうちに、ご親族に連絡を入れておいた方がいいと思う」

杏奈「はい」

杏奈、松林の情報欄に書かれた緊急連絡先を見ている。叔父・松林治の番号に電話をかける、杏奈。

○同・面談室

杏奈と松林治（64）、テーブル席に對面して座っている。

治「聡は：あと：どれくらいなんでしょうか」

杏奈「今後：食事や水分の摂取が徐々に難しくなっていくと思われます。体の痛みも強くなってくるでしょう。栄養剤や痛み止めの点滴をして対処していきますが、担当医師の見解では：一、二か月ぐらいかと：」

治、俯いている。

治「参ったな：。俺の方が聡より先に逝くもんだと思ってたから」

杏奈「：」

治「看護師さん、お願いです。どうか聡が、最後まで…なるべく苦しむことのないように…助けてやってください」

治、杏奈に深々と頭を下げる。

治「どうか、聡を…安らかに旅立てるよう…お願いします」

杏奈「…全力を尽くします」

○同・ロッカールーム（タ）

杏奈、仁美の携帯番号が書かれたメモを見ている。

杏奈「仁美…お願いだから出てよね」

杏奈、スマホを取り出し、仁美の番号に電話を掛ける。

○奥平家・キッチン（タ）

野菜を刻んでいる、仁美。

仁美、スマホの着信に気づいて、手を止める。スマホ画面に表示された、登録名のない番号。

仁美「…知らないわよ」

着信を無視して、再び野菜を刻みだす、

仁美。刻み方が荒くなる。

○同・ロッカールーム（タ）

杏奈、仁美が電話に出ないため、苛立
って電話を切る。

深呼吸する、杏奈。

杏奈「違う違う：私がいけないんだよね。リ
ーダーとして情けなかったから」

杏奈、仁美の番号宛にCメールを作成
する。

『杏奈です、急にごめんなさい。大事
な話があります。折り返し電話くださ
い』

送信ボタンを押す、杏奈。

○奥平家・キッチン（タ）

Cメール受信の着信音に気づき、再び
手を止める、仁美。

仁美、メール文を読む。

仁美「…やっぱり杏奈か」

仁美、我慢ならず電話を折り返す。

○同・ロッカールーム（タ）

杏奈、仁美からの着信に出る。

深呼吸して、

杏奈「…もしもし」

○奥平家・キッチン（タ）

杏奈と通話中の仁美。

仁美「杏奈…久しぶり。急に何？」

杏奈の声「仁美、久しぶり…急にごめん。あ

の…さくらからも電話あったと思うけど…」

仁美「さくらにも伝えたけど、再結成とかラ

イブだとかの話…私は無理だから。家庭が

あるし」

杏奈の声「…だよな」

仁美「…わかってもらえるかな」

杏奈「…たしかに忙しいと思う。それに…」

うちら色々あったし、仁美が嫌な思いしてるも：今なら理解できる。だけど、今回だけは何とか：協力してほしいの」

仁美「：劣等感」

杏奈の声「：劣等感？」

仁美「私のせいでデビューできずに解散したこと。その後も、ネットで誹謗中傷された。うちの夫もファンに中傷されたトラウマで、いまだに辛くあたってくるし。トリコローズだった過去を忘れたいの」

杏奈の声「：ねえ、仁美。本当にあの時は、一方的に批判して申し訳なかったと思う。致し方ない状況で、不安だったのは仁美も同じ：いやそれ以上だったと思う」

○同・ロッカールーム（タ）

杏奈、仁美と通話中。

杏奈「：私も最近まで隠してた。トリコロールズだった過去。色んな後悔が襲ってきて辛かったから。だけど：いちばん後悔して

いるのは、仁美とのこと。仁美に：おめでとう、私があんたを守るからって：リーダーとして言えなかったこと」

仁美の声「：え」

杏奈「生きてるって、この世に生まれてくるって奇跡だよ。看護師になって、改めて感じてる。うちらが出会って、曲がりなりにもアイドルやって、うちのライブを支えにさ、頑張って生きてきたファンがいるんだよ。奇跡だよ、そんなの」

仁美の声「：そう」

杏奈「そんなファンが、病の恐怖と戦っている。私は最後まで支えてあげたい。看護師としてだけでなく：彼にとっての最後のアイドルとして」

しばしの沈黙が流れる。

仁美の声「：杏奈の想いはわかった。だけど、夫にバレたら面倒なことになるだろうし：約束はできない」

杏奈「もしもの時は：さくらと2人で頑張る

けど、トリコロールズは：仁美も入れて3人だからね」

ロッカールームの入り口で、静かに杏奈の通話を聞いている、みなみ。

○居酒屋「ようちゃん」店内（深夜）

閉店し、店内には杏奈とさくらの2人のみ。

鏡の前で、ぎこちなく踊る2人。

杏奈「練習場所、提供してくれてサンキュ」

さくら「うちはお昼から営業して、22時閉店だからね。その方がお客さんも終電を逃さないでしょ？」

杏奈「なるほど」

さくら、息があがり、途中で踊りを止める。

さくら「：きつい。さすがに三十路にはきついよ、この振り付け！」

踊りながら、さくらと会話する杏奈。

杏奈「日曜まで時間ないし。きついなんて言

ってらんない。それに：うちらを待っていてくれる人がいる。頑張るのみ！」

さくら「いや：懐かしいな、杏奈のスパルタ。

明日も朝から仕事でしょ？帰んなくて大丈夫？」

杏奈「ん？今夜もここに泊めて。あとお風呂と着替えもお借りします！」

さくら「はあー？」

一心不乱に踊る、汗だくの杏奈。

さくら「しよーがない。泊めてあげよう」

杏奈につられて、さくらも再び踊りだす。

○奥平家のマンション・リビング（深夜）

ワインを飲んでいる優一。

仁美、優一に近づいて

仁美「あなた、相談んだけど…」

ワインを飲み干す優一。

優一「相談って何？」

1 ヤングシナリオ大賞 応募用紙

仁美「…今度の日曜、同窓会に呼ばれている。夕飯までには戻るから、その日だけ…私ひとりで外出させてほしいの」

優一「俺はその日、ゴルフの約束があるんだよ。唯は誰がみるんだ？」

仁美「なら…実家の両親に預けます」

優一「駄目だ。君の両親は、すぐ唯を甘やかす。そもそも、同窓会なんて行く意味あるの？高校の同窓会？」

仁美「…そうです」

優一、鼻で笑う。

優一「高校か。あの二人もいるんだろ？」

仁美「…いるけど、解散してから疎遠になっ

たし…あなたが心配することはないと…」

優一「俺があいつらの事、嫌いな事はわかりきっているだろ？あいつらだって、俺のこ
と嫌ってるし。胸糞が悪いんだよ！」

声を荒げる優一に、固まる仁美。

優一「とにかく、同窓会に行くな。絶対に」

仁美、静かに頷き、リビングを出る。

○奥平家・唯の部屋（深夜）

布団に潜り、タブレットでトリコロ
ルズの動画を観ている唯。

ドアの開く音。

唯、動画を閉じる。

仁美、ドアをゆっくり開けて唯の様子
を見る。

寝たふりをしている、唯。

○居酒屋「ようちゃん」店内（早朝）

テーブル席に座り、朝食を食べている、

杏奈、さくら、洋平の3人。

杏奈「だし巻き、プロ級に美味しい」

洋平「ありがとう。一応、プロなんで」

さくら「…杏奈、日曜の午後から、本当に病

棟の会議室借りれるの？ちゃんと許可とつ

てんでしょうね？」

杏奈「ぶっちゃけ、これから申請するけど…

なんとかなるでしょ」

さくら「はあ？」

杏奈「もし駄目でもさ、狭いハコで踊ってた
ウチらよ？たたみ一畳分の広さがあれば、
廊下でも十分踊れる」

洋平「いや、カッコいいな！廊下でも踊れる
って凄いな」

さくら「…いや、廊下とか普通に迷惑でしょ。
リーダーやってた割には、ホントいい加減
なんだから！てか、そんなマインドで看護
師としても大丈夫なの？」

杏奈「んもおー！場所とか衣装とか練習とか、
準備する時間が圧倒的に足りないの！でも
ね、やらなきゃならないのよ！松林さんに
は時間がないの！」

洋平、箸を置き、

洋平「松林さんって、もしかして…シヨール
ンさんのこと？」

洋平、スマホを取り出して写真を杏奈
とさくらに見せる。

洋平と松林がジョッキを手に笑顔で写
っている写真。

さくら「はしゃいでるな」

杏奈「あっ！松林さん！お知り合いですか？」

洋平「これは去年、トリコロールズファンの
オフ会で撮った写真。ショーリンさん、今

年は忙しくて行けないって不参加だったけ

ど、まさか：入院してたなんて。水臭い：

なんで俺たちに言ってくれなかったんだ」

さくら「そこ、繋がりがあったんだ」

杏奈「でも：仲間に言えない気持ちもわかる。

いろんな葛藤が、松林さんにもあるだろう

から」

杏奈、椅子から勢いよく立ち上がる。

杏奈「ご馳走様でした。叶えなきゃ、絶対に。

いつてきます！」

さくら&洋平「：いつてらっしゃい」

杏奈、ドアを開け、出ていく。

洋平「若いっていいなあ。熱くて眩しい」

さくら「三十路が若いかどうかからんけど、

それが杏奈の生き様だから。隠れ猪突猛進」

○北山病院・ロッカールーム（朝）

白衣に着替えた杏奈、まじまじと申請書を眺めている。

みなみが室内に入ってきて、

みなみ「おはよう、すごい顔してるけど、どうしたの？」

杏奈「あつ、おはようございます。今度の日曜に、会議室を30分程お借りしたくて：使用許可申請書を書いたんですが：」

みなみ「それって例の再結成ライブの件で？」

杏奈「：はい、そうです。悩みましたが、どうしても、松沢さんの願いを叶えてあげたくて」

みなみ「それだったら、私が昨日のうちに出して許可貰つといた。各方面にも根回し済みだから、安心して」

杏奈「ええ！桂木さん、なんで：そこまで」
みなみ「てか、昨日ここでさ、西沢さんが大きい声で電話してるから。あんな熱い思い聞いちゃったら、応援したくなるでしょ」

杏奈「聞かれてましたか！：桂木さん、あ

りがとうございます」

杏奈、みなみに頭をさげる。

みなみ「さあ、行った行った！業務が沢山あるんだから」

杏奈「はい、失礼します！」

杏奈、室内を出ていく。

○同・病室（朝）

杏奈、松林の元を訪れる。

ベットから身体を起こし、スマホでトリコロズのライブ動画を観ている松林。

杏奈「おはようございます、松林さん」

松林、杏奈に気づいてイヤホンを外し、

松林「おはよう、杏奈ちゃん」

杏奈「朗報ですよ。今日の日曜日、再結成ライブします。会議室で。30分だけです」

松林「えっ？本当に！」

杏奈「：悩みましたが、頑張ることにしまし

た。松林さんのため：いや、自分のためでもあるんです」

松林「奇跡だ：ありがとう！杏奈ちゃん！」

松林、杏奈を拝みはじめる。

その光景を怪訝そうに見ている、他の入院患者たち。

杏奈「拝まなくて大丈夫ですよー、皆さん見てるので」

松林「ところで、仁美ちゃんも来れるの？」

杏奈、指で頭を搔く。

杏奈「えっと：それがまだ未定でして」

松林「あっ：ごめんね！僕は仁美ちゃん推しとかじゃなくて、箱推しだから！あの3人を、最後のライブで観たいからさ：」

杏奈「：ですよね」

○居酒屋「ようちゃん」店内（深夜）

閉店し、客のいない店内。

杏奈とさくら、踊りながら会話をしている。

杏奈「日曜日の14時から30分間だけど、
病院の会議室、借りれることになりました！
た！」

さくら「おおーっ！良かった！さすがに廊下
で踊るとか迷惑だからね」

杏奈「でさ、肝心の衣装だけど…さすがに当
時のは着れないし」

さくら「20代前半の体型は…さすがに保て
なかったわ」

杏奈「あと3日だよ…リメイクしてる時間も
ないし、何か良いアイデアある？」

洋平、厨房から手をあげる。

洋平「ハイ！三色のハッピーでよければ、すぐ
貸せるよ！ファンたち有志が作成したやつ」

さくら「ハッピー？それ踊りづらくない？」

洋平「ショーリンさんも一緒に作った、思い
出のハッピーなんだけど…」

杏奈「それいいかも…うん、それにしよ！松
林さんも喜んでくれると思う」

さくら「まあ…体型カバーできるからいいか」

杏奈「そういえば：仁美の番号、教えてくれてありがとね。仁美と電話で話したよ」

さくら「来れないって言ってたでしょ？」

杏奈「参加は約束できないと言ってたけど、

私の想いは伝わったと思う」

さくら「ふーん。杏奈は諦めが悪くなったね」

杏奈「熱意って言ってよ。仁美を信じてる。

今度こそ」

洋平、MP3プレイヤーを操作し、トリコロールズの曲を店内に流す。

杏奈「！」

さくら「ちよっ！」

洋平「そろそろ歌も練習しないとね」

○北山病院・ロッカールーム（朝）

誰もいない室内で、踊りの練習をして

いる杏奈。

杏奈「あと2日！」

○西沢家・杏奈の部屋（夜）

アップテンポの音楽に合わせて、歌いながら踊る、杏奈。

ドアを開け、覗き見している公子。

杏奈「ちよっとお母さん！覗かないでよ！」

公子「恥ずかしがって、どーすんのよ。当日

はもっと人がいるでしょ？」

杏奈「あと2日しかなくて、覚えるのに必死なんだから！」

公子「ま、頑張りなさいね。あと2時間で土曜ですよー」

杏奈「もう、追い込まないでよ！」

○北山病院・ロッカールーム（朝）

杏奈、踊りの練習をしている。

杏奈「あと、1日！」

足音が聞こえ、

杏奈「まずい！」

素早く踊りを止める杏奈。

○奥平家・リビング

仁美、トリコロールズの青い衣装を、
スーツケースの中から取り出している。

仁美「今更：着れるわけないだろうけど」

○居酒屋「ようちゃん」店内（深夜）

閉店し、客のいない店内。

杏奈とさくら、トリコロールズの曲に
合わせて踊りながら、会話をしている。

さくら「いよいよ：明日は本番ね」

杏奈、額の汗を手で拭う。

杏奈「：怒涛の5日間だった」

さくら「ある意味、人生を変える5日間だっ

たよ」

杏奈「：巻き込んで、ごめん」

さくら「いや、巻き込んでくれてサンキュ」

杏奈「なんで？」

さくら「なんでって：燻ってた過去が塗り替
えられたから。きつついけどさ、杏奈と踊
ってんの楽しいもん。ショーリンさんに感
謝だわ！」

杏奈「明日、振りとか歌詞とか忘れたら、せ
つかくのライブが大惨事だからね！黒歴史、
更新しちゃうからね！」
さくら「わかってるよ！」

○奥平家・寝室（深夜）

イビキをかいて寝ている、優一。
隣で横になっている仁美、眠れずに静
かにベッドから出る。

○同・唯の部屋（深夜）

ベッドで眠っている、唯。
ドアをそっと開ける、仁美。
仁美、机の上の作文が目に入る。

『ママみたいなアイドルになりたい』
と拙い字で書かれた作文を目にし、
涙目になっている仁美。
仁美、涙を拭った手で、拳を握る。

○同・唯の部屋（早朝）

仁美がドアを開けて入ってくる。

仁美「唯、入るわよ」

仁美に起こされ、眠い目をこする、唯。

唯「日曜の朝からどうしたの？」

仁美「唯、これからママとライブに行かない？」

唯「ライブ？何の？」

仁美「トリコロールズの再結成ライブ」

唯「えっ何それ！行くに決まってるよ！」

ベッドから飛び起きる、唯。

○奥平家・リビング（朝）

ゴルフ道具の準備をしている優一。

優一を横目に、唯を連れて足早にリビングを出ようとする仁美。

優一「出かけるのか？」

仁美「ええ」

優一「どこ行くんだ：まさか同窓会か？仁美！どういうつもりだ！」

仁美「そっちが、どういうつもり？」

優一「は？」

仁美「私は私。あなたに命令されて、生きてくつもりはない」

優一「俺は夫として、父としての務めを果たしてきただろ？何が不満なんだ！」

仁美「結婚したら：こうだもの。もう限界！解散よ！じゃなくて、離婚よ！」

仁美、唯を連れて足早に出ていく。

優一「：離婚て」

立ち尽くしている、優一。

○北山病院・病室（朝）

松林の元を訪れる、杏奈。

杏奈「ショーリンさん、おはようございます」
驚いた顔の、松林。

松林「杏奈ちゃん、どうしてその呼び名を？」

杏奈、トリコロール色のハッピを松林に渡す。

松林「これ：みんなで作ったやつ：」

杏奈「ふふ、ライブの戦闘服です」

松林、ワクワクしながらハッピを羽織る。

杏奈、ポケットから3色のサイリウムを取り出して、松林に渡す。

杏奈「あと、魔法の光です。これで：ライブ中、挫けそうな私を導いてください」

松林「杏奈ちゃん：ありがとね」

杏奈「ライブの時間が近くなったら、迎えにきますね」

松林、杏奈の言葉を噛みしめながら、頷く。

○同・会議室前の廊下

微かに手拍子が聞こえてくる。

フランス国旗のようなトリコロール色のハッピを着た、杏奈とさくら。

さくら「：またトイレ行きたいかも」

杏奈「え？気のせいだよ！もう始めなきや！」

会議室の扉を開く2人。

○同・会議室内

杏奈とさくらが入場する。

車イスに座った松林、洋平やその他のファン数名が赤・白・青のサイリウムを手に、歓声や拍手を送る。

杏奈「えーっ、本日は皆さんお集まりいただき、誠に…」

さくら「リーダー、挨拶がカタい！みんな、ここは病院だから、普段のライブみたいに大声で騒げないけど、手にした魔法の光で応援をお願いします！」

サイリウムを頭上にかかげる、ファン達。

洋平、照明を暗くする。

突如、会議室の扉が開く音。

振り返る、松林や洋平たちファン。

仁美「遅れてごめん！」

仁美、唯を連れて会議室に入ってくる。

杏奈&さくら「仁美！」

仁美「ごめん…みんな。8年待たせて」

仁美、コートをその場で脱ぎ捨てる。

青いステージ衣装を着用している仁美。

歓喜に沸く場内。

さくら「ラストライブの衣装じゃん！なんで

今でも着れるかなー凄いね！」

杏奈「悔しいけど、仁美には敵わない」

仁美、杏奈とさくらの元へ向かう。

仁美「私は二人の情熱に敵わない。だから、

ここに來たの」

唯、洋平からハッピを預かり、仁美の

元へ。

唯「浮いちゃうから、これ着て」

仁美、苦笑いしてハッピを受け取る。

唯「ママ、いま最高にかっこいい！頑張ってる」

仁美「唯：ありがとう」

洋平、MP3プレーヤーを操作し、ト

リコロールの曲を場内に流す。

杏奈「ちよっと待って！」

洋平、慌てて曲を止める。

さくら「どうした？」

杏奈「戦う前のルーティーン。忘れてない？」

杏奈、仁美、さくらが円陣を組んでいる。

杏奈「今日も客席は満員：とはいかないけど、大切なファンと家族のために捧げよう！」

頷く、仁美とさくら。

杏奈「トリコロールズ、ファイト！」

杏奈・仁美・さくら「オー！」

歓声に沸く会場。

×

×

×

アップテンポの曲に合わせて歌い、踊る杏奈、仁美、さくら。

杏奈・仁美・さくら「いえい！心ここにあら
ず！キミのトリコサー」

サイリウムを両手に持ち、声援を送るファンたち。

唯「ママー！」

洋平「さくらー！」

松林「杏奈――！仁美――！さくら――！」

松林、笑顔で涙を流す。

3色のサイリウムを懸命に振るファン達。

杏奈M「ずっと……みていたい。この魔法の光を」

杏奈、仁美とさくらと目が合う。

杏奈M「ずっと一緒に踊っていたい。力、尽きるまで」

パフォーマンスを終えて、観客にお辞儀をする杏奈、仁美、さくら。

杏奈・仁美・さくら「ありがとうございましたー！」

場内から拍手喝采。

○駅前・路上

T 半年後。

待ち合わせ中の杏奈。

杏奈、スマホで松林と一緒に撮った写真を見返している。

杏奈「…」

涙目の杏奈。

さくらと仁美、杏奈に近づく。

仁美「おまたせ！」

さくら「まーた写真みて泣いてる。泣く暇あ

ったらね、練習よ練習！」

杏奈「うるさい！」

仁美「喧嘩しないの。夏祭りのイベントまで、

あと3時間しかないんだからね。集中！」

さくら「しかし…だれが予想した？三十路で

の再結成アーンド活動再開」

杏奈「兼業は大変だけど…こうして、また3

人で踊れるのも、ショーリンさんのお陰だ

ね」

頷く、仁美とさくら。

さくら「まじめにやないと、天国から怒ら

れちゃう。そういえば、唯ちゃんは？」

仁美「唯はね、今ダンススクールに行ってる」

杏奈「ダンススクール？小1から？」

仁美「アイドル業界はライバル多いからね。」

早く踊りをマスターしたいんだって」

さくら「アイドル目指してんだ！仁美の影

響？」

仁美「かもね。でも私がアイドル目指したのは杏奈とさくらの影響だけだね」

笑いあう、3人。

杏奈、スマホをバックにしまって、

杏奈「よし、そろそろ行くよ！」

夏祭りの会場へ向かう、3人。

タイトル『推しの彼方』

へ終
▽